

力〈ちから〉もちのお相撲〈すもう〉さん（兵庫区山田町）

東小部〈ひがしおうぶ〉村（いまの鈴蘭台〈すずらんだい〉の北）に生れた、大木戸弾右衛門義高〈おおきどだんえもんよしとか〉という力士〈りきし〉がおりました。背の高さは六尺〈しゃく〉四寸〈すん〉（一九四センチ）、重さは四十二貫〈かん〉（一五七キロ）といえますから、たいへん大きいのでよく知られていました。弾右衛門は、いまから二百九十年ほどむかしの貞享〈じょうきょう〉という年号のころの人で、のちには、大坂（大阪）町奉行のおかかえの力士になって名をあげた人です。

弾右衛門は、幼いころから相撲〈すもう〉がすきでした。やがて大きくなって、なんとかえらい相撲取りになりたいと思って、垂水区伊川谷〈たるみくいかわだに〉の太山寺〈たいさんじ〉の薬師堂〈やくしどう〉にこもって、大力をさずかりたいと二十一日間の断食をして、薬師如来〈やくしにょらい〉さまにおいのりをしました。弾右衛門は百人力がほしいと思ったのです。

すると、満願〈まんがん〉の夜の丑〈うし〉みつどき（午後二時ごろ）、赤ん坊をだいた白髪〈はくはつ〉の老人があらわれて、「この子をしばらく抱〈だ〉いていておくれ。」

と、弾右衛門にあずけました。弾右衛門は、

「いとやすいことだ。」

と、赤ん坊をうけると、老人はかき消すようにいなくなってしまう、いつまでたっても帰ってきません。ふしぎに思っているうちに、夜が明けました。ふと見ると、抱いているのは赤ん坊ではなく、とても大きな岩だったのです。弾右衛門は、自分の願いがかなったのだと、たいへんよろこびました。

しかし、あまりの怪力〈かいりき〉のために、あるくと足が地面にめりこみ、自由にあるけません。また、そのあとがくぼみになって、雨が降ると水たまりになるので、村の人たちが苦情〈くじょう〉をいうようになりました。弾右衛門は、自分にもあまりにも大きな望〈のぞ〉みをしたことに気がつきました。人間はなにも百人力もの力には必要ないんだ。その時に応じて、相手の倍〈ばい〉だけの力でたくさんだ、と考えたのです。弾右衛門は、「向こうの倍の力」にしてほしい、と願をかけなおし、そのとおりになったといい伝えられています。

弾右衛門は、自分がどのくらい力があるのかと、ためしてみようと思いました。お寺の仁王門〈におうもん〉の柱をかかえて、ぐっと持ちあげると、柱は苦もなく礎石〈そせき〉をはなれました。弾右衛門は、手近かにあったコツパ（木の削〈けず〉りかけ）をひらって、その間にはさんで、柱を持ちあげたしるしとしました。また、弾右衛門は、直径三十センチほどの丸い石を、たもとに入れてあるいていたといわれています。この石は、「たもと石」といって、今も残っているそうです。

弾右衛門の弟子〈でし〉に、熊内村〈くもちむら〉（今の葺合区〈ふきあいく〉）で生れた、甲山権太〈かぶとやまごんた〉という力士がおりました。とても力が強く、こんな話が残っています。ある夏の夕方〈ゆうがた〉、師匠〈ししょう〉の弾右衛門が、野天で鉄砲風呂〈てっぽうぶろ〉に入っていると、にわかに雨が降ってきました。権太は、師匠が入っているままの風呂桶〈ふろおけ〉をかかえて、軒下〈のきした〉へはこんだといわれています。世の中には、力もちの人がいるものですね。

（故内田信太郎—明治一〇年生談）

